

令和6年度  
石川工業高等専門学校の課題  
外部評価報告書



令和7年3月



## はじめに

石川工業高等専門学校は、昭和40年4月に国立高等専門学校第4期校として設立され、爾来、本科9,393名(女子1,690名)、専攻科616名(女子119名)もの人材を送り出してきました。

この間、社会、特に産業技術の世界は設立当時、想像もつかなかった変貌をとげ、高等教育また高等専門学校に期待される役割も大きく変わり続けてきました。

石川高専が送り出してきた人材は、このような時代の変化に適応し、時宜にかなったカリキュラム編成や授業内容(シラバス)の変更等を重ねてきた成果であり証しでもあります。

近年で言えば、主に情報教育関係で先導的役割などを担うべく、情報セキュリティ人材育成事業、全学科での情報教育強化・高度化推進プロジェクト、MDASH応用基礎レベルの全学科取得、産業DXをけん引する高度専門人材育成事業の取り組みなど、本学の教育システムは絶え間ない変革と進化を続けてきました。さらには、高度情報人材養成のため令和7年度からのコース制導入等も決まり準備を進めています。

大きな変化として、法令等の改正により平成3年以降、高等教育機関は、外部評価も含め自ら点検・評価を行い、結果を公表することで教育の質の向上・改善に取り組んでいくことが強化されました。

本学では、平成7年度に自己点検評価部会を設置して自己点検評価を実施し、その結果を報告書『明日へ向けて』として3～5年ごとに発行しております。また、同時に「運営諮問会議」を設置し、毎年地域の教育研究機関、行政機関、企業等の学外有識者の皆様による外部評価を受け、ご指摘を受けた課題について改善を図り、本学の運営にフィードバックしています。

「運営諮問会議」による外部評価は、地域の事情に精通されている有識者の皆様から評価をいただくものとして、毎年実施し、国立高専の重要な使命の一つである産学連携や地域への技術者人材輩出等について地域の皆様の様々なニーズを踏まえたご意見をお伺いできる貴重な場と認識しております。

質の向上に資する外部評価としては「運営諮問会議」の他にも、独立行政法人法に基づく中期目標・中期計画等の政府への実績報告制度、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による学校運営、健全性を評価する機関別認証評価(直近受審は令和3年度)・認定専攻科(直近受審は令和6年度)・学位授与に係る教員の適性を審査する特例認定(平成26年度より毎年度受審)の制度、日本技術者教育認定機構(JABEE)によるワシントン協定に基づく国際認証(令和4～5年度に受審)、国立高専教育国際標準(KIS)認定評価(令和6年度に受審)などがあり、これらを十分に活かして、石川高専の教育の質を向上させてまいります。

令和6年度におきましても、本学の活動状況について、教育・研究・社会貢献・管理運営等の諸活動に区分して地域の学外有識者の皆様にご説明させていただくとともに、忌憚のないご指摘とご意見をお願いするため、令和7年3月6日に運営諮問会議を開催いたしました。

本報告書は、各委員の皆様からの評価をそのままの形でまとめてあります。良い評価をいただいている項目がある一方で、厳しい評価をいただいた項目があることも認識しております。

厳しい評価内容項目については、今後、逐次分析し、それらに対応した改革を積極的に遂行することが、本学に課せられた重要な使命であり、それがまた評価していただいた委員の皆様の労に報いることでもありと承知しております。

最後になりましたが、運営諮問会議の皆様には、ご多用な中での多大な労に心から深く感謝申し上げますと共に、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和7年3月31日

石川工業高等専門学校  
校長 富田 大志

# 目 次

はじめに

I	これまでの経過	1
II	外部評価（運営諮問会議）	
1	石川工業高等専門学校運営諮問会議委員名簿	2
2	令和6年度石川工業高等専門学校運営諮問会議議事概要	3
3	外部評価シート	9
III	全体講評	13
	運営諮問会議開催の公表	15

おわりに

## I これまでの経過

第1回運営協議会（平成16年3月開催）

第2回運営協議会（平成17年3月開催）

第3回運営協議会（平成18年3月開催）

第4回運営協議会（平成20年3月開催）

平成20年度運営諮問会議（平成21年3月開催）

平成21年度第1回運営諮問会議（平成21年11月開催）

平成21年度第2回運営諮問会議（平成22年3月開催）

平成22年度運営諮問会議（平成23年3月開催）

平成23年度運営諮問会議（平成24年3月開催）

平成24年度運営諮問会議（平成25年2月開催）

平成25年度運営諮問会議（平成26年2月開催）

平成26年度運営諮問会議（平成27年2月開催）

平成27年度運営諮問会議（平成28年2月開催）

平成28年度運営諮問会議（平成29年3月開催）

平成29年度運営諮問会議（平成30年3月開催）

平成30年度運営諮問会議（平成31年2月開催）

令和元年度運営諮問会議（令和2年2月開催）

令和2年度運営諮問会議（令和3年2月開催）

令和3年度運営諮問会議（令和4年3月開催）

令和4年度運営諮問会議（令和5年3月開催）

令和5年度運営諮問会議（令和6年3月開催）

令和6年度運営諮問会議（令和7年3月開催）

## Ⅱ 外部評価（運営諮問会議）

### 1 石川工業高等専門学校運営諮問会議 委員名簿

北陸先端科学技術大学院大学 理事（学生・教育連携担当）・副学長	飯 田 弘 之
石川県小中学校長会 会長 （白山市立北辰中学校長）	才 鷹 浩 子
石川県商工労働部長	酒 井 雅 洋
金沢大学大学院 自然科学研究科長	瀬 戸 章 文
石川工業高等専門学校 技術振興交流会 会長 （株式会社豊蔵組 代表取締役）	豊 蔵 享 一
石川工業高等専門学校 同窓会会長 （澁谷工業株式会社メカトロ統括本部サイラス本部 参事技監）	中 井 隆 一
公益財団法人石川県産業創出支援機構 常務理事	中 野 俊 一
津幡町長	矢 田 富 郎

（五十音順）

## 2 令和6年度石川工業高等専門学校運営諮問会議議事概要

(1) 日 時 令和7年3月6日(木) 14:00～16:30

(2) 場 所 石川工業高等専門学校 管理棟4階 大講義室

(3) 出席者

### ・運営諮問会議委員

飯 田 弘 之 (北陸先端科学技術大学院大学 理事 (学生・教育連携担当)・副学長)

才 鷹 浩 子 (石川県小中学校長会 会長)

(白山市立北辰中学校長)

瀬 戸 章 文 (金沢大学大学院 自然科学研究科長)

中 井 隆 一 (石川工業高等専門学校 同窓会会長)

(澁谷工業株式会社メカトロ統括本部サイラス本部 参事技監)

中 野 俊 一 (公益財団法人石川県産業創出支援機構 常務理事)

### ・学校側出席者

校 長

富 田 大 志

副校長 (地域・国際連携担当)

道 地 慶 子

校長補佐 (教務主事)

義 岡 秀 晃

校長補佐 (学生主事)

畔 田 博 文

校長補佐 (寮務主事)

岩 竹 淳

校長補佐 (図書情報主事, 図書館長)

佐 野 陽 之

校長補佐 (入試広報担当)

徳 井 直 樹

専攻科長

山 田 悟

事務部長

岩 崎 紀美枝

総務課長

亀 田 潤

学生課長

河 岸 孝 政

・欠席者 酒井委員, 豊蔵委員, 矢田委員

【会議写真】



瀬戸委員



富田校長



飯田委員



才鷹委員



中井委員



中野委員



会議の様子

## (4) 議事概要

### 【開 会】

総務課長から、令和6年度運営諮問会議の開会宣言があり、出席委員の紹介、本校出席者の紹介を行った。引き続き、配付資料の確認、日程の確認を行った。

### 【校長挨拶及び議長選出】

富田校長から、本会議の開催にあたり挨拶があり、その後、当会議の議長を瀬戸委員（金沢大学大学院 自然科学研究科長）に委嘱したい旨の提案があり、了承された。また、運営諮問会議委員に対し、配付資料及び当会議の結果を踏まえた評価シートへの評価記載について、協力依頼があった。

### 【議 事】

#### 1. 「石川工業高等専門学校の実況 外部評価のための資料」の概要

標記全体説明及び資料の各章の概要について、次のとおり説明があった。

#### 全体説明（富田校長）

##### I 理念・目的

第1章 学校の目的（岩崎事務部長）

##### II 教育活動

第2章 教育組織（実施体制）（岩崎事務部長）

第3章 教員及び教育支援者等（岩崎事務部長）

第4章 学生の受け入れ（徳井校長補佐（入試広報担当））

第5章 教育の方法および内容（義岡教務主事）

第6章 教育の成果（義岡教務主事）

第7章 学生支援等（義岡教務主事、畔田学生主事、岩竹寮務主事）

第8章 施設・設備（岩崎事務部長、佐野図書情報主事）

第9章 教育の質の向上及び改善のためのシステム（義岡教務主事）

##### III 研究活動

第10章 研究体制と支援（道地副校長）

##### IV 社会活動

第11章 地域社会との連携（道地副校長）

第12章 国際社会との交流（道地副校長）

##### V 広報・評価・管理運営

第13章 広報活動（佐野図書情報主事）

第14章 本校が受ける評価（岩崎事務部長）

第15章 財務（亀田総務課長）

本校からの説明後、質疑応答、意見交換が行われた。

主な質疑等は以下のとおり。

(委員)

校長先生の説明を受けて、学校の「夢に向かって磨き創り拓く」というビジョンに感銘を受けた。石川高専を目指す生徒は目標が明確で意欲的であり、推薦で入学した生徒の成績が良いことから、それが持続していると感じられた。

入試に関しては、オープンカレッジや体験入学が進路決定に大きな影響を与えており、生徒たちは「楽しかった」「雰囲気良かった」「質問しやすかった」といった前向きな感想を持っていた。今後もこうした広報活動を工夫して継続してほしいと思う。

また、要望として、推薦入試の結果発表が翌日の私立出願に間に合うよう、当日中に結果が分かる仕組み（例：ネットでの確認）を導入してほしい。退学率が0.8%と非常に低いことに感心しつつ、不登校や別室登校などの背景や対応についても伺いたい。

(本校)

退学の理由はさまざまであるが、主な要因としては、高専の専門分野が本人の進路希望と合致せず、モチベーションを維持できなくなることが挙げられる。近年では、メンタル面の不調によるケースも増加しており、本人自身でも原因を明確に把握できない場合がある。合理的配慮がなされれば順調に修学できることもあるが、気持ちの面でつまづいてしまうことも少なくない。なお、現在、本校では別室で授業を受けている生徒はいない。

本校では中学校と同様に担任制を採用しており、担任教員が定期的に全生徒と面談を行い、日頃の様子を見守っている。生徒に異変が見られた場合には、個別対応にとどまらず、組織的に対応する方針をとっており、それによって救われる生徒も存在する。ただし、カウンセラーにつないだとしてもすべての問題が解決するとは限らず、心の不調が表面化しないまま不登校となる生徒も一部に見られる。そのようなケースには、教職員が特に注意を払って対応している。

推薦入試においては、学力試験後に正式な合格発表が行われるが、現時点では「内定」という形で合格者のみが中学校に通知される仕組みとなっている。不合格者への伝達が難しく、学校側としても明確に伝えることが困難な状況である。そのため、受験生自身がWeb上で可否を確認できる仕組みの導入を、現在検討しているところである。

(委員)

日本の科学技術力低下を食い止めるためにも、高専への志願者増加が重要だと考えており、特に中学生や保護者の関心を高める必要がある。全国的な課題だが、石川高専ではこの問題にどう取り組んでいるのか。

(本校)

少子化の中で志願者確保は難しい課題だが、石川高専では「こども石川高専」や出前授業、STEAM教育などを通じて小中学生への啓発活動に力を入れている。全国的にも高専フェスなどの取り組みが進んでいるが、学内の教育研究とのバランスにジレンマもあり、今後も努力を続けていく方針である。

(委員)

DXエンジニア育成において、技術の進化に対応するため、企業（例：小松製作所）との連

携や大学での研究成果をカリキュラムに取り入れる工夫があるか。

(本校)

DX 人材育成に向けて、石川高専では企業からの課題を活用したグループワークや、出前授業・連携授業を通じた実践的な教育を行っている。特に「デジタル人材リテラシー」科目では、全国の高専生が受講可能で、企業の専門家によるオムニバス形式の授業を実施。今後とも新カリキュラムやCOMPASS 事業などを通じて、産業界との連携を強化し、教育内容の充実を図っていく方針である。

(委員)

教育カリキュラムや卒業研究に加え、学生同士の交流（部活動、ロボコン、海外研修など）を通じて人間力や創造力が育まれているかを評価することが重要だと考えている。特に社会での通用性を考えると、こうした非公式な活動の影響は大きく、同窓会なども活用しながら、学生間のインタラクションをどう支援・評価しているか。

(本校)

学生の間力やヒューマンスキルの評価には「PROG 診断」を活用しており、PROG 診断を通じて学生の間力や社会性（コンピテンシー）を数値化し、数値の変化とその背景にある経験を分析している。学生自身も取り組みと成長の関係を可視化できるようにしており、1 年生から実施して継続的な成長を把握する仕組みを整えている。

特に部活動やコンテスト、学外実習などを通じて、4・5 年生でプロジェクトマネジメント力が伸びている傾向が見られる。今後は、こうした課外活動と成長の関係をより詳細に分析し、教育効果の把握に生かしていく考えである。

(委員)

その PROG は SPI 診断のようなものか。民間が製作したものを導入しているのか。就職先のアドバイスなども職業適性などをふまえて行っているのか。

(本校)

民間のものを導入している。一般社会で活躍する人とその数値を比較することで、点数化をしていく。

PROG 診断には職業適性の評価は含まれていないが、自分の強みを数値化して可視化できるため、自己 PR などに活用されている。特に日本人学生は自己評価が低くなりがちだが、数値で自信を持つことで、自分の強みを効果的にアピールできるようになる。

## 【閉 会】

富田校長から、委員に対する謝辞に引き続き、総務課長から閉会宣言があった。

(以上)

## (5) 資 料

1. 石川工業高等専門学校<sup>の</sup>現況-外部評価のための資料-
2. 石川工業高等専門学校の現況（資料編）
3. 石川工業高等専門学校評価シート（別途：5段階評点基準）（委員のみ）
4. 石川工業高等専門学校運営諮問会議規程
5. 石川工業高等専門学校「学校要覧」（2024年度版）
6. 石川工業高等専門学校 2025 学校案内リーフレット
7. 石川工業高等専門学校の課題 令和5年度 外部評価報告書
8. トライアル研究センター ニュースレター Vol. 48、49

### 3 外部評価シート

#### 記入要領

評点欄には下の基準による5段階評価の評点をご記入ください。

- 5：優れている あるいは 適切である。
- 4：やや優れている あるいは ほぼ適切である。
- 3：普通 あるいは どちらとも言えない。
- 2：やや劣っている あるいは あまり適切とは言えない。
- 1：劣っている あるいは 適切とは言えない。

部	章番号	章タイトル	令和6年度		令和5年度
			自己評価 平均評定 (5段階)	委員評価 平均評点 (5段階)	委員評価 平均評点 (5段階)
第Ⅰ部 理念・目的		本校の精神			
		沿革 概要及び卒業生			
	1	学校の目的	5	5.0	5.0
第Ⅱ部 教育活動	2	教育組織（実施体制）	5	5.0	5.0
	3	教員及び教育支援者等	4	4.8	4.6
	4	学生の受け入れ	5	5.0	5.0
	5	教育の方法および内容	5	5.0	4.6
	6	教育の成果	5	5.0	5.0
	7	学生支援 学習支援等（7.1～7.4） 進路指導（7.9～7.10）	5	5.0	5.0
		学生支援 課外活動・生活指導・ 学生相談等（7.5～7.7）	5	5.0	4.8
		学生支援 学生寮（7.8）	5	5.0	5.0
	8	施設・設備 共同利用施設	4	4.4	4.8
9	教育の質の向上及び改善のための システム	5	5.0	5.0	
第Ⅲ部 研究活動	10	研究体制と支援	4	4.8	4.8
第Ⅳ部 社会活動	11	地域社会との連携	4	5.0	5.0
	12	国際社会との交流	4	4.6	5.0
第Ⅴ部 広報・評価・ 管理運営	13	広報活動	4	4.2	5.0
	14	本学が受ける評価			
	15	財務			

## 委員のご意見

部	章	記入欄
第Ⅰ部 理念・目的	本校の精神 沿革 概要及び卒業生 第1章 学校の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代社会や産業界において、高専の役割は益々重要であり、「研究開発型技術者の育成」を基本理念として、教育、研究を堅実に進められている。</li> <li>・創設理念を大切にしつつ、校長先生を中心として、全教職員が貴学のミッション達成のため一丸となって取り組んでいる姿勢が強く感じられた。</li> <li>・「夢に向かって磨き創り拓く」の精神は素晴らしいと思う。将来に向かって大きな夢をもつことで、学生の可能性を大きく引き出してくれると思う。</li> </ul>
第Ⅱ部 教育活動	第2章 教育組織（実施体制） 第3章 教員及び教育支援者等 第4章 学生の受け入れ 第5章 教育の方法および内容 第6章 教育の成果 第7章 学生支援 第8章 施設・設備 第9章 教育の質の向上及び改善のためのシステム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PROGによる社会人基礎力の可視化と、その発展にむけた様々な教育プログラムが展開されている。COMPASS5.0を拠点校として実施されている点も評価できる。DX、AI教育を推進されており、民間企業等との連携も十分に行われている。海外研修も全専攻で再開されており、企業と連携した海外インターンシップも実施されている。今後も多くの学生が国際的な経験ができる環境整備を期待したい。</li> <li>・教育面では、常に改革（改善）すべく努めており、時流にあった教育内容となるように工夫している。学生受け入れにおいては少子化などの影響で苦戦を強いられている様子だが、最大限に魅力発揮できるように努力している。学生支援では、学生個々へのケアが功を奏し、退学率が極めて少ない。一方で、学外活動や学生の自主活動を通して、学生の成長を深める好結果を得ている。</li> <li>・入学試験に関して、推薦入試の結果を本人や保護者が確認できるようにすると、中学校での入試業務がスムーズになるので、是非、ご検討いただきたい。</li> <li>・オープンカレッジでは、中学生が興味や関心を高める工夫がなされている。パンフレットも分かりやすく、学生の舞台発表等により、参加した中学生の意思決定に繋がっている。</li> <li>・寮内の国際交流室の設置等、学生支援が充実しており、よいと思う。</li> </ul>
第Ⅲ部 研究活動	第10章 研究体制と支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期的に見て、科研費の獲得が若干減少傾向にある。設備や時間の制約があることは理解できるが、大学や民間企業との連携を活用して、研究機関としての高専の発</li> </ul>

		<p>展にも期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育や学生支援に多くの時間とエフォートを割かなければならない制約の下で、研究面でも相当の実績を残している。</li> </ul>
<p>第Ⅳ部 社会活動</p>	<p>第 11 章 地域社会との連携 第 12 章 国際社会との交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術振興交流会の参加企業数が順調に伸びており、海外インターンシップにも発展していることは高く評価される。留学生の受け入れ、協定校との交流など、様々な海外活動を実施されており、今後更なる発展を期待したい。</li> <li>・産学連携では、同窓会のバックアップもあり、大変活発に展開している印象である。地域社会との連携・貢献を通してさらに石川高専の地元でのプレゼンスが高まると期待される。国際面では、留学生の受入れや海外派遣などの仕組みを年々充実させている。</li> <li>・海外インターンシップや海外研修等、学生の国際的な活動が増えていて、素晴らしいと思った。</li> <li>・国際交流も今一段の推進を期待する。</li> </ul>
<p>第Ⅴ部 広報・評価・ 管理運営</p>	<p>第 13 章 広報活動 第 14 章 本校が受ける評価 第 15 章 財務</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネット、SNS などを活用して、高専の魅力をより一層、対外的に発信されていくことを期待したい。</li> <li>・広報冊子の発行や種々の広報活動を展開し、ますます充実している印象である。修了生の社会での活躍はもちろん、よく訓練された在学学生をアンバサダーのような役割で前面で活躍してもらうことで志願者およびその保護者へのインパクトがさらに高まるものと期待される。評価面では複数の公的評価機関から高い評価を受けたことは特筆すべきである。財務面でも安定した経営がなされている。</li> <li>・HP が、中学生にとって理解しやすい内容になっている。特に動画は好評である。</li> <li>・石川高専の素晴らしい取り組みを積極的に発信してほしい。</li> </ul>
<p>[全体についてのご意見]</p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震の影響も残るなか、多くの教育活動を堅実に実施されており、その成果が学生の成長という形で着実に出ていけると感じられる。一方で、研究面では科研費の採択が若干低下傾向にあり、大学や企業を活用した研究面での発展も期待したい。</li> <li>・校長先生を中心として、全教職員が貴学のミッション達成のため一丸となって取り組むそのよき伝統が継続されている。学生ファーストの精神が感じられ、学生諸君が目標に向かって打ち込める非常に良い環境を整えている。運営諮問会議での意見交換からヒントを得てさらに発展できる可能性も感じられる。今後のさらなる発展を期待する。</li> </ul>		

・海外留学等にチャレンジする意欲的な学生が増えてきているのは、素晴らしいことだと思う。今日、地球上には、戦争や地域紛争、貧困、環境問題などが深刻になっている。そのような中、多くの日本人が活躍している。こうした時代だからこそ、自国のことだけでなく、他の国や地域のことを理解し、尊重し、どの国の人に対しても公正公平に接していくことが求められる。今後も世界に貢献する人材育成に取り組んでほしいと思う。

・大手企業にも現物回帰の必要性が言われ始めている。DX・AIに対する取り組みももちろん必須だが、工学の基礎をしっかり身につけたエンジニアの育成が重要と考える。

・少子化に伴う産業界の人手不足や地球温暖化による温室効果ガス削減などの社会課題解決に向けて、これから益々エンジニアの果たす役割の重要性が大きくなると考えている。こうしたなかで、貴校が取り組まれている教育活動、研究活動、社会活動は非常に有益なものであり、貴校の基本理念である創造性豊かな技術者の育成に期待をしている。

### Ⅲ 全体講評

・本校を卒業後、機械メーカーにて長年機械設計に従事した経験から、特に、金属工学や機構学などの基礎工学の学びが、実務における設計やシステム全体の理解において重要な土台となっている。また、DXやAIといった先端技術はあくまで「ツール」であり、最終的には現物を扱う力が不可欠である。実際に、現場ではシミュレーションだけに頼るのではなく、実物を通じた確認が重要である。また、学生時代の経験や人間力の育成が社会での強みになる。近年の学生のメンタル面の課題もあるが、実践的かつ人間力のあるエンジニア育成が重要である。

・今回の会議では、石川高専の教育内容や取り組みについて、これまで以上に詳しく知ることができ、大変有意義な機会となった。特に、DX・AI分野における先進的な教育実践や、国際性を重視した活動に感銘を受けた。また、JAISTとの連携に関する提案もあり、過去には留学生との交流イベントを通じて、英語を用いた活動が実施された実績も紹介された。今後は、AIをキーワードとしたさらなる連携の可能性についても検討が進められることが期待される。このような取り組みは、校長会や中学生・保護者への情報発信にも大いに活用できる内容であり、今後の広報活動においても重要な材料となると考える。

・近年、企業から多く聞かれる課題の一つが人手の確保であり、少子化の進行により人材確保がますます困難になっている。そのような状況下で、石川高専が取り組んでいる技術教育や人材育成は、日本の産業構造の変革において極めて重要であると感じた。本日はその優れた取り組みを実感でき、感謝している。

・まず感じたのは、少子化と理系離れの進行により、理工系分野への志願者数が全国的に減少しているという現状である。これは高専に限らず、大学の工学系学部においても共通の課題であり、入試倍率の低下に歯止めがかからない状況にある。

このような背景から、進路選択以前の中学校段階での動機づけが非常に重要であると改めて実感した。理系の面白さや技術の社会的意義を早い段階で伝えるために、高専・大学が連携し、中学校へのアウトリーチ活動を積極的に行う必要がある。石川高専がこうした取り組みに積極的であることに心強さを感じた。今後、ぜひ連携を図っていきたい。

教育内容については、学修成果の数値化や可視化に取り組んでおられる点が印象的であった。特に、DX・IT・AIなどの分野を各専攻の枠を超えて積極的に教育に取り入れていることは、今後の技術者育成にとって不可欠な方向性であると感じている。

一方で、専門基礎に加えて情報系スキルも身につけなければならない現代の学生に対し、限られた時間の中でいかに効率よく教育するかが課題である。これは大学においても同様であり、電子情報通信分野の定員増や、文理融合型のデジタル人材育成にも取り組み始めている。今後は高専とも連携しながら、地域全体での人材育成体制を構築していきたい。

出口の面では、日本の高専システム（KOSEN）は、国際的に見ても非常に優れた教育モデルであり、モンゴル・タイ・ベトナムなど海外にも輸出されている実績がある。このシステムに対する民間企業からの信頼も厚く、今後もその期待は一層高まっていくと考える。

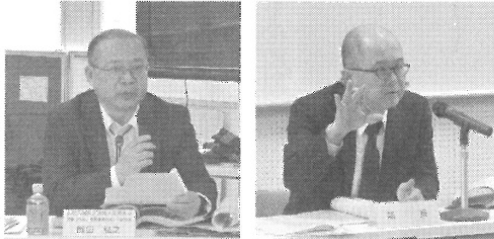
就職に関しては引き続き売り手市場が続く見通しであり、高専卒業生は「金の卵」として各社から高く評価されている。今後は、企業が教育段階から関与し、共に人材を育てていく仕組みづくりが重要となる。その中で、単なる寄附ではなく、「投資」としての研究費・人材育成費への支援を企業側に理解いただき、持続的な産学連携エコシステムを築いていく必要がある。

これは大学にも共通する課題であり、高専と大学、さらには地域企業が一体となって、今後の人材育成を担っていくことが強く求められていると感じた。

石川高専 運営諮問会議を開催

石川高専では、学外有識者による外部評価を行う運営諮問会議を3月6日に開催した。同会議は、石川高専の教育、研究、社会活動等の自己点検と評価に基づき、学外有識者からの評価と提言を通じて、今後の教育の改善、研究及び地域貢献の活性化を図ることを目的としている。

- 外部評価委員
- ◎瀬戸章文・金沢大大学院自然科学研究科長
  - ◎飯田弘之・北陸先端科学技術大学院大学理事・副学長
  - ◎才藤浩子・白山市立北辰中学校長・石川県小中学校長会会長
  - ◎中井隆一・澁谷工業(株)メカトロ統括本部サイラス本部参事技監・石川高専同窓会会長
  - ◎中野俊一・公益財団法人石川県産業創出支援機構常務理事



瀬戸金沢大大学院自然科学研究科長(左)と飯田北陸先端大理事・副学長(右)

今年度は大学や地域企業等の学外有識者5名と学校側から校長、副校長、主事等幹部教職員11名が出席した。はじめに、富田大志校長の挨拶に続いて、瀬戸章文金沢大学大学院自然科学研究科長が議長に選出された。

議事に入り、富田校長による学校の概要説明に続き、各担当者による教育活動、学生指導、研究活動、地域貢献や国際交流などが説明され、質疑応答や活発な意見交換が行われた。委員からは、多くの有意義な意見や提言が寄せられ、最後に各委員から全体の講評が述べられた。

同校では、今回の貴重な提言を活かして一層の運営改善を行い、今後の活動の充実につなげていくこととしている。



石川高専 運営諮問会議

石川高専は3月6日、学外有識者による外部評価を行う運営諮問会議を開催し、大学や地域企業等の学外有識者5名と同校の校長、副校長、主事等幹部教職員11名が出席した。

はじめに、富田大志校長の挨拶があり、引き続き瀬戸章文金沢大学大学院自然科学研究科長が議長に選出された。

議事に入り、富田校長による学校の概要説明に続き、各担当者による教育活動、学生指導、研究活動、地域貢献や国際交流等の説明があり、質疑応答や活発な意見交換が行われた。



発言する富田校長(中)

## おわりに

まずは、令和6年度の運営諮問会議を無事に開催できたことに対し、出席された委員の皆様をはじめ、関係者各位に感謝を申し上げます。本校の1年間の教育活動や取組に対する外部有識者からのご意見を伺える本会議は、本校にとって貴重な機会であり、開催できたことは本当に幸いなことです。

各委員の方々からは 会議資料及びそれについての本校からの説明に対して、会議の場において有益なご指摘や質問、また本校にとっては更に自信を深めることができるような高い評価などをいただきました。それらの要点について少しまとめておきたいと思います。

まず、本校の理念・目的に関し、「研究開発型技術者の育成」という理念と「夢に向かって磨き創り拓く」精神のもと、全教職員が一丸となって学生の可能性を最大限に引き出す教育・研究を実践している点が総合的に高く評価されました。

教育活動においては、社会人基礎力育成プログラム（PROG 活用）、COMPASS5.0 拠点校としてのGX 教育推進、企業連携、全学科での海外研修・インターンシップといった実践的かつ国際的な教育の充実、手厚い学生支援による低い退学率と学生の顕著な成長、そして中学校との連携を強化した入試広報活動がいずれも高い評価を得ています。

研究活動に関しては、教育・学生支援に注力しつつも相当の実績を上げている点は高く評価された一方で、科学研究費助成事業（科研費）獲得の減少傾向に対しては、大学や民間企業との連携強化による研究機関としてのさらなる発展を期待する意見が出されました。

また、産学連携では同窓会の力強い支援による活発な取り組みが、技術振興交流会の参加企業数増加に加え、地域社会への貢献と地元石川高専のプレゼンス向上に繋がると期待されており、国際交流においても留学生の受け入れ、協定校との交流、学生の海外派遣などが年々充実し、特に海外インターンシップへの発展と学生の国際的な活動の増加が高く評価されています。

さらに広報活動では、広報冊子の発行や中学生にも分かりやすいホームページ（動画も好評）の充実に加え、複数の公的評価機関からの高い評価や安定した財務状況も強みとされました。今後はインターネットや SNS 等の積極的な活用、社会で活躍する修了生や在学学生をアンバサダーとして起用することにより、石川高専の素晴らしい取り組みや魅力を一層対外的に発信し、志願者およびその保護者への訴求効果を高めていくことを期待する意見が寄せられました。

今年度の運営諮問会議全体をとおして、本校の各種取り組みが高い評価を得られたことは、大いに励みになるとともに、ご指摘のあった課題については、委員の皆様のご提言に率直に傾聴し、本校の教育目的の達成のため、今後とも十分に生かしていかなばならないと改めて銘じているところです。

最後に、年度末のご多忙かつ大変な状況の下で、多大なご尽力をいただきました運営諮問会議委員各位に対し、改めまして深甚の謝意を表します。

令和7年3月31日

石川工業高等専門学校  
副校長（管理運営担当） 道地 慶子



---

---

石川工業高等専門学校の課題  
令和6年度 外部評価報告書

発行 令和7年6月  
編集 総合企画会議  
発行者 石川工業高等専門学校  
〒929-0392 石川県河北郡津幡町北中条夕1  
TEL 076-288-8000  
FAX 076-288-8014  
URL <https://www.ishikawa-nct.ac.jp/>

---

---



独立行政法人国立高等専門学校機構

石川工業高等専門学校

National Institute of Technology (KOSEN), Ishikawa College